

# 営農情報

第108号平成23年7月1日発行

(イチゴ)

J A 福岡大城

南筑後普及指導センター

5月中旬から6月下旬にかけて日照不足、多雨で天候不順の日が多く、降雨や曇天の中で鉢上げ作業をせざるを得なかったところが多かったようです。苗が軟弱徒長気味で「炭そ病の発生」が心配されます。「炭そ病」を防ぐには育苗期の定期的な防除が重要です。雨の合間にしっかり防除し、病害発生の抑制に努めましょう。

また、輪斑病、うどんこ病やハダニ、カキノヒメヨコバイの害がみられ、防除が必要です。一部で、挿した後に葉の腐れ症状が発生しており、罹病部位を摘んで除去してください。

本田は、降雨にあてて未熟有機物の分解、及び集積塩基の除去を図り、梅雨が明けたら太陽熱（またはガス）消毒を行いましょう。

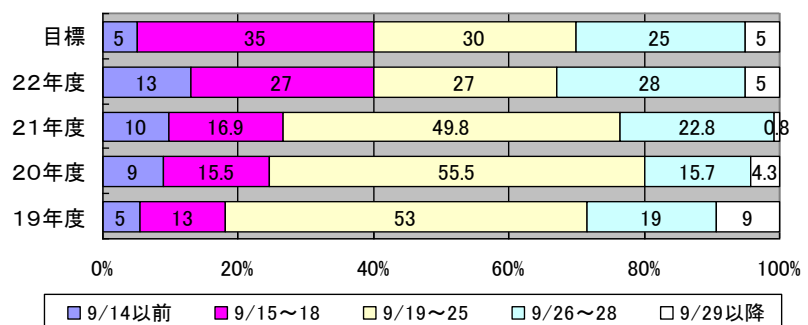
## 作型の考え方

下記作型を参考に、計画的な育苗を行ってください。

作型 (利用)	入庫	出庫	定植日	陽光 処理	収穫開始見込
株冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	3回	11月中旬
株冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	2回	11月中～下旬
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19～20日	1回	11月下旬
J A共同株冷 (2回に分けて入庫)	8月29日頃	9月17日頃	9月16～19日	2回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月11～14日		11月中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日		11月中～下旬
自宅株冷の2回目処理 (10日間程度処理)			9月19～22日		12月上旬
普通ポット1・2 普通ポット3 普通ポット4(厳寒期安定出荷)			9月20～25日 9月26～28日 9月29日～		12月上旬 12月中旬 12月下旬

JA福岡大城定植割合

右のグラフの作型別作付目標を参考に、作付計画を立てて、作型にあった育苗管理を行う。



# 育苗管理

## 育苗目標

- ☆ **クラウン径8mm以上の良苗作り**（収量確保）
- ☆ **病害虫被害のない苗作り**  
（炭そ病、ハダニ等を本ほに持ち込まない）
- ☆ **作型にあわせた苗作り**

## かん水

- 活着するまでは、葉水程度のかん水（ミストかん水）を1日に数回行う。
- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 炭そ病対策、徒長防止のため、活着後は午前中主体のかん水とし、夜間は土がやや乾き気味になる程度が望ましい。小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、少量多回数かん水に心がける。

## 肥培管理

- 窒素過多の軟弱な苗に「炭そ病」の発生が多い傾向にあり、肥料の効かせ過ぎに気を付け、発生を確認した場合は、発病株・周辺株を除去して追肥を控える。
- 活着したら（鉢上げ約10日後）、置き肥を開始する。（例：I B化成を鉢あたり1粒（普通ポットは2粒））
- 置き肥の効果が現れるまで薄めの液肥をかん注してもよい。（例：OKF 1で1,500～2,000倍）
- 省力化のため7月5日頃に追加の置き肥をする。
- 置き肥の効果を見ながら7月中旬から7日おきに液肥をかん注する。（例：OKF 1で800倍、100cc/株）

## 下葉の除去（摘葉）

- 活着後、根が十分にまわってから摘葉を開始する。
- 最初は徒長防止とうどんこ病防止のために強めの摘葉を行い、葉数2.5～3枚にする。
- 2回目以降は、1回当りの摘葉数は2枚以内とし、葉数4枚を維持するように摘葉を行う。ただし、ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。
- 傷口から「炭そ病」菌が侵入しやすくなるため、生育が悪いときや、降雨直前・雨天時の摘葉はしない。摘葉作業直後は「炭そ病」の予防防除を必ず行う（傷口からの感染防止）。

# 病害虫防除等

農薬ごとの使用回数制限は、親株からの切り離しからカウントされますので、使用基準を守り、必ず防除履歴に記入しましょう。

## 炭そ病

- 下葉の除去作業直後（当日）と降雨前後の防除を徹底する。
- 病原菌が雨やかん水で発病株から周辺株に飛散して感染拡大するので、発生を確認した場合は、ただちに除去し、その周辺1mの株も除去する。
- 苗床の排水対策を講じておく。
- **定期的な防除**に心がけること。
- ポット間隔をできる限り広くとる。
- 過剰施肥をしない。
- 雨よけ育苗することで、病原菌の飛散を軽減することができる。梅雨明け以降はビニルを外す。

## 疫病

- 梅雨時期から8、9月の高温多雨期に発生が多い。
- 登録薬剤は、リドミルMZ水和剤等を炭そ病の定期防除時に組み入れる。

## うどんこ病

- 梅雨明けまでに病斑の上位葉への進展を止め（炭そ病とうどんこ病両方に効果のある薬剤を散布）、その後の葉かぎで定植時（株冷入庫時）に下葉に残らないようにする。
- 低温処理を開始する時点で、下葉に病斑が残っている場合は低温処理には使用せず、普通ポットに作型を変更する。

## カキノヒメヨコバイ

- 1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こし、7～8月の育苗時に被害がもっとも大きい。

## ハダニ類

- 発生が多い場合は、葉の展開が遅れ、苗の生育が悪くなる。低温処理開始までには防除を必ず行っておく。葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。

## ヨトウムシ類

- 育苗後半より発生が目立ってくるため、発生を認めた場合は防除を行う。

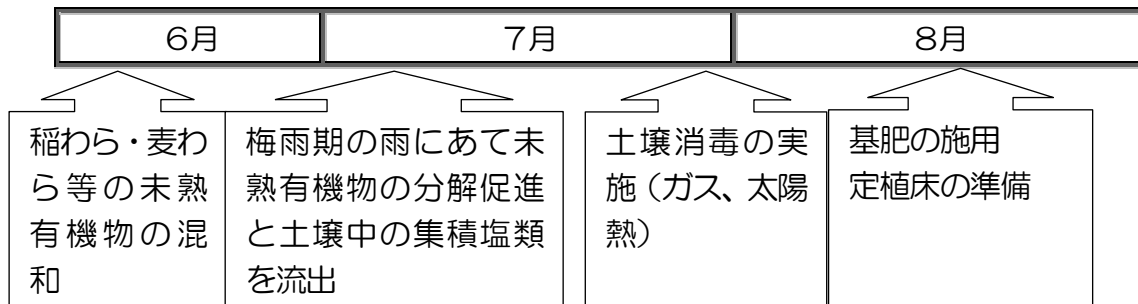
## コガネムシ類幼虫

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンS Lゾル500倍のポットかん注を行っておく。

# 本田管理

収穫が終了したハウスは、夏の期間にリフレッシュを行い、次年度に備えましょう。

- 有機物の施用 : **前年度の栽培により消耗した土壤有機物の補給**
  - ・イチゴ栽培で消耗する土壤有機物は 20～30 a 分の稲わらに相当する。
  - ・稲わら、麦わら、家畜糞等の未熟な有機物は、梅雨前に投入して土壤混和し、梅雨の雨にあてる。
- 降雨にあてる : **土壤中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出**
  - ・土壤中の微生物が、大量の雨水で活性化する。
- 土壤消毒 : **土壤病害虫(ネグサレセンチュウ、萎黄病)の予防と雑草防除**
  - ・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。  
(土壤病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う)
  - ・ガス消毒は、クロルピクリン錠剤等がある。
  - ・ガス消毒は、マスク着用など事故に注意し、農薬の使用量・使用時期・使用方法を守る。



**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!**